

今年も就職解禁日が過ぎ、街に紺スーツの若者があふれる季節になった。何年前か前までは12月から会社訪問が解禁、採用選考は4月1日からになっていた。その頃の年の暮れのある日、昼食に出ようとした私は三井物産の本社ビル1階玄関に大勢の学生が集まっているのを目にして、「今日は何があるの?」と秘書に尋ねた。

「採用活動が解禁になったんです」という答えに、今の採用活動は随分遅いんだなと思ったが、彼らは皆3年生だと聞いて驚いた。不覚にして、会長であつたその時も社長の時も、毎年の経営会議で採用人数についての議論はしていたが、学生の採用活動がそんなに早く始まっているとは知らずにいた。

大学では1・2年次で教養や基礎を学び、3年次からやっと専門分野の勉強が始まるのに、もう就職活動で会社や先輩をあちこち訪問して歩くのだ。そんなことでは、とても落ち着いて学習や研究は

大学の役割と 企業の採用活動



できないだろうし、自分がなにをやりた
いかの見極めもつかないまま会社選択を
することにならないかと心配した。

思い返せば、かく言う私も50年近く昔、
大学の工学部で精密機械工学を専攻して
いたが、4年生の夏休みにあるメーカー
の工場実習に参加した。今でいうインター
ンシップのようなものだったが、立派な
大工場で2カ月働いてみた後に、自分の
居る場所はここではないと痛感した。

私は、世界中を飛び回って仕事をして
みたいという自分の気持ちを再確認した
ように思った。当時は、工場実習をした
会社に就職するという学科としての不文
律のようなものがあつたので、それを破
るのは大変で、国費で工学を学んでおき
ながら、メーカーに行かないのはどうい
うことかと叱責を受けたのを覚えている。

それでもものきな50年前のことだった
ので、11月になつても三井物産では採用
の面接してくれたが、幹部面接でいき

なり「わが社の月給は安いので食べていけないよ、それでもよいのかな？」と言われた。確かに当時の商社の給与は一流のメーカーに比べるとはるかに低く、収入面での魅力は低かった。それでも、入社3年目にしてアメリカのダートマス大学に留学させてもらい、ロンドンをベースに中近東、アフリカと世界を飛び回る仕事は本当に面白く、自分に合っていたとしみじみ思う。

「自分探し」という言葉が一時期若い人の間で流行したが、自分の生き方を探り、どの道に進むかを決心するためのプロセスとして、学生はどんなことにも消費できる時間とエネルギーを持つべきである。企業が他社に負けずに優秀な人材を確保して将来の礎にしたい気持ちはよく分かるが、それならば、学生には落ち着いて広い意味での勉強がじっくりできる環境を提供すべきである。大学に入って3年もしないうちに人気志望企業のランキン

● 松瑩 ● 国際大学理事長

● 松瑩 ●

グにあおられ、マニユアル本や情報誌でハウツーを必死に身に付けて会社を訪ね歩く学生の姿は本当に気の毒だと思う。

そんな思いで、4年ほど前に日本貿易会の会長をしていた時に、企業の採用活動の開始を大幅に遅らせてはどうかという提言をした。その後、メディアでも取り上げられ、さまざまな議論が各界でなされ、政府の要請もあつて2015年は会社訪問が3年生の3月から、採用選考は4年生の8月からと3カ月の後ろ倒しを実現した。しかし、学生および企業の採用担当者から大変なクレームがあつて、2016年は8月から6月への選考の後ろ倒しとなったのはご承知のとおりである。

迷走を続ける企業の採用活動だが、もっと多くの人がこの問題の重要性について認識し、対応を真剣に検討すべきだと思っている。目先の利益だけでなく、日本の将来を担う若者をどう育てるか、私たち大人の良識が問われているのだ。